

酒さけにたい対たいす
(白居易はくきよい)

蝸牛角上爭何事
石火光中寄此身
隨富隨貧且歡樂
不開口笑是癡人

蝸牛かぎゅう角上かくじょう
何事なにごとをか
争あらしう

解説 人間の一生ははなはだ短いのだから、貧富にかかわらず愉快に過ごすべきだという詩。

石火せつか光中こうちゅう
此この身みを
寄よす

語釈 ※蝸牛角上||蝸牛はかたつむり。かたつむりの角の上で。※石火光中||火打ち石のカチツと光る火の中に。※隨富隨貧||富む者は富むなりに、貧しい者は貧しいなりに。※且||まあまあ、ちよつとの意。※開口笑||十分に口を開いてころよく笑うこと。※癡人||癡は痴とも書く。ばか者、おろかな人。

富とみに
随したがい
貧ひんに
随したがい
且しばらく
歡樂かんらくせよ

口くちを
開ひらいて
笑わらわざるは
是これ
癡人ちじん

通釈 世の中の人はかたつむりの角の上の小さく狭い所で、一体、何を争おうとするのか。火打ち石の火が発してすぐ消えてしまう、その一瞬の間に人はこの世に生きているようなものだ。だから、金持ちは金持ちなりに、貧乏人は貧乏人なりに、分にぶん応じて、暫くしばらく樂しむべきである。大きな口を開いて笑わない者はバカ者だよ。